

辞書（事典）の“イノベーション” Wikipediaの権威論的意味

元武蔵大学 藤田哲司

目的・方法

『辞書の政治学』で知られる安田敏朗は、新著『大槻文彦 言海 辞書と日本の近代』の結論部で次のように述べる。「…『公金』の問題で国家事業としての辞書編纂が挫折していくのは、ある意味では『健全』なことかもしれない。Ⅱ章で荒尾禎秀が辞書は『時代の要請』の反映であると述べていたことを紹介したが…『文明国標準』としての辞書というあり方は…人文科学研究に冷淡な日本国家の姿勢を示すものでもある、という点できわめて『健全』であると思うのである」（安田 [2018:186]）。この〈時代の要請としての辞書〉という視点を踏まえ、「辞書という権威」（私的判断放棄・自発的遵守）という観点から、辞書（事典）の“イノベーション” Wikipediaにおける注目すべき側面に限定して報告を行う。つまり、Wikipedia に欠けているものを照らし、同時にこれまでの辞書（事典）が帯びていた権威論的意味についても論究したい。

具体的には、辞書自体の権威源泉性（1）、辞書を拠り所とした権威関係性（2）に分け、Wikipedia に特徴的な問題をめぐり概観する。結果・結論 Wikipedia は「事典」と銘打っているが、「辞書」的項目も含む包括的辞書事典である（「検索」項は広辞苑にあり、ブリタニカ国際大百科事典になく、Wikipedia にある、など）。項目に関して、Wikipedia の無断転載が問題視された例があるが（『日本国紀』）、そもそも辞書（事典）に著作権はない。辞書の“イノベーション”における権威論的意味は、“Wikipedia の〈脱〉政治性と〈脱〉権威性”にある。前者こそ Wikipedia のイノベーション（プラスの新奇性）といえるが、後者には問題がある（「引きこもり」など比較的新規の社会現象の項目記載追記。字数制限がなく画像表記や参照 web リンクが容易。民主主義的匿名的編集がもたらす信用のなさ）。「一定の権威のある専門家が項目を執筆するような在来型の百科事典とは性格が大きく異なっている」（ウィキペディアと地理教育との連携 山田晴道 [2012]）。「現実の社会における学会組織は、それなりに社会的権威をもっており、場合によっては、特に医学系の学会に見られるように、学会が承認したか否かで、違法性が左右されることがあるように、ある種の権力ももっている。つまり、アカデミズムにおいては、学会組織には 裁定者としての権威なり権力があり、何らかの判断を最終的に決することができるのだがウィキペディアのアナーキーな民主主義の仕組みの中では、匿名の無責任な声を議論から排除することは困難である」（ウィキペディアとアカデミズムの間 山田晴通 [2011:62]）。新たな発想に対するお墨付きを与えるところに辞書の真価がある。この点で Wikipedia は限定的だ。「ポスト真実」という発想に対する辞書がもたらすお墨付き（OED の現実形成力）を想起していただきたい。権威性を帯びたプラットフォームとしての Wikipedia の可能性は研究者の関わり方にかかっている。

参考文献：

Lih, Andrew [2009] The Wikipedia Revolution: How a Bunch of Nobodies Created the World's Greatest Encyclopedia = 千葉敏生 [2009] 『ウィキペディア・レボリューションー世界最大の百科事典はいかにして生まれたか』早川書房 ほか